第 37 回

比較文明学会大会

プログラム

～「グローバル文明」と「和」＜やわらぎ＞の思想～

伊東俊太郎先生卒寿記念特別講演

2019年10月12日（土）～13日（日）

中央大学市ヶ谷田町キャンパス

（〒162-8478　東京都新宿区市谷田町1-18）

協　　賛：　　中央大学政策文化研究所

〈大会趣旨〉

高度情報化技術の劇的な進歩により、情報の世界一元化ともいえるグローバル社会が実現しつつある。加えて科学技術の進歩は、ヒト、モノ、資本、情報等の移動のグローバル化を一層加速させている。つまり、世界中が居ながらにしてネットにより瞬時に繋がり、また、モノの移動も一層容易となっている。

それは、これまで人々を隔てていた様々な障壁の低減化、特に伝統的な価値のボーダレス化であり、グローバル時代の光の部分である。しかし、その一方で、伝統的の価値観を毀損することになり、その反動、つまり、グローバル化の対抗現象ともいえる利己的自民族主義（新ナショナリズム）、ポピュリズム、それはブレグジット、トランプ政権の誕生、異民族排斥運動等に象徴される、ここ数年急激に台頭している憂慮すべき現象がある。さらに、無秩序な経済の国際化による極端な富の集中と、格差社会の出現――。これらは従来、国際社会が求めてきた諸文化・文明の相利共生を前提とする国際秩序の形成という目標への逆行ともいえる現象であり、いわばグローバル化社会の負の現象である。現代社会は、この新たな問題への解決のきっかけさえ見いだせずにいる状況にある。

とはいえ、AI・IT 技術の急激な進歩は、あらゆる面で一層のグローバル化社会の形成と不可分であり、現代社会はこの相反する現象の混沌状態にあるといえる。そして、この混沌状況の解決こそ、グローバル時代に生きる我々に課された喫緊の課題である。とりわけ、グローバル文明社会ともいえる高度情報化社会の基礎となる、多様なる文化、文明の共生を可能とする思想、特にその前提となると考えられる寛容思想の構築は急務である。しかし現状は、このグローバル文明時代を支える基本思想ともいえる、融和共生思想の構築に関して、十分な検討がなされているとは言い難い。

第３７回比較文明学会大会においては、グローバル文明社会を支える融和・共生思想の構築という、現代社会喫緊の課題に対して、日本文明が歴史的に育んできた融和・共生（「和（ワ：ヤワラギ)」）の思想を中心に、日本の融和思想の現代的な意義を検討し、更にその成果を世界に発信することで、諸文明の融和共生を可能とするグローバル文明社会構築に資することを目指す。

というのも、近年その伝統がやや薄れている感があるが、比較文明学はその草創期以来「未来思考の学問であることを目指し、比較文明学の立場から時代が直面する諸問題の解決に取り組む積極的な学問でなければならない」という学問的な DNA を持ち、各時代の様々な問題に比較文明学の立場から積極的に貢献してきた伝統を形成してきたからだ。

以上のことから、第 37 回大会実行委員会としては、本大会を比較文明学会の伝統を強く意識し、グローバル文明社会の基本思想構築に積極的に貢献する学会としての方向を切り開く契機としたい。従来このようなグローバルな視点を持った研究は、欧米の研究者がリードするところであり、その主張も西洋の学的伝統に即したものが中心となりがちであった。しかし、グローバル文明下が支配的な世界は、従来のような啓蒙主義的な一方向からの発想だけでは対応できない多極化状況を呈しており、グローバル文明時代に相応しい多面的な思考を融和統合する寛容思想の構築が不可欠である。つまり、相利共生を可能とするグローバル文明社会の構築には、世界中の英知の融和による新たな思想の創成が求められており、比較文明学会もその要請に応える使命がある。

日本は歴史的に世界中の多様な文化、文明を平和的に融和し、その思想を創成してきた長い歴史があり、その思想的なキーワードは、聖徳太子以来「和（ワ：ﾔﾜﾗｷﾞ）」の思想である。以来日本社会は、多様な価値観･文明等の優劣選別を争うよりも、それらの融和を重視し、多様な文化を基とする平和社会を形成してきた。この点は日本の歴史を貫いており、それは単に文化のみならず、政治・経済の思想や制度にまで及ぶが、これらは特に近代に入り和辻哲郎や鈴木大拙、丸山真男、さらには伊東俊太郎本学会名誉会長はじめ多方面の研究者が日本思想の特徴として指摘している。

しかし、従来の「和」の研究は、日本思想史や文化史の脈絡で言及することに留まっており、文明学からの総合的な検討は、なされてこないに等しかった。そこで、本大会では「和」の思想を、文明学的な視点から、総合的に研究することを目指すとともに、その成果を発足間もない中央大学国際情報学部の会場から世界に向けて発信する。

目次

大会プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

シンポジウムプログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

シンポジウム要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

伊東俊太郎先生卒寿記念特別講演プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

伊東俊太郎先生卒寿記念特別講演要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

個人研究発表プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

個人研究発表部会１　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

個人研究発表部会２　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

個人研究発表部会３　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

個人研究発表部会４　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

個人研究発表部会５　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

個人研究発表部会６　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

個人研究発表部会７　要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

比較文明学会第 37 回大会プログラム

【大会 1 日目　2019 年 10 月 12 日（土）】

10:00～12:00　役員会（902 教室）

13:00～　受付開始（５F エレベーター前）
大会参加費：会員　3,000 円、非会員参加費無料・資料代 500 円

13:30～17:00　シンポジウム：「グローバル文明」と「和」〈やわらぎ〉の思想（501 教室）

司会：加藤久典（中央大学）
パネリスト：
牧野英二（法政大学名誉教授）
保坂俊司（中央大学教授）
宮嶋俊一（北海道大学准教授）

17:00～18:00　総会（501 教室）

18:00～20:00　懇親会（１F）
懇親会費：一般会員 6000 円、学生会員 3000 円
※非会員も参加できます。受付でその旨をお申し出ください。

【大会 2 日目　2019 年 10 月 13 日（日）】

9:00～　受付開始（7F エレベーター前）

9:30～13:10　個人研究発表
部会１（701 教室 9:30～11:00）
部会２（701 教室 11:10～12:40）
部会３（702 教室 9:30～11:00）
部会４（702 教室 11:10～12:40）
部会５（801 教室 9:30～11:00）
部会６（801 教室 11:10～13:10）
部会７（802 教室 9:30～11:30）

13:30～15:20　伊東俊太郎先生卒寿記念特別講演（902 教室）
□特別講演：「文明の世界的分布と日本文明の役割」
講演者：伊東俊太郎（比較文明学会名誉会長・国際比較文明学会終身名誉会長・東京大学名誉教授）
司会：横山玲子

15:30～17:00　□全体討議：「伊東文明学との対話――その顕彰と創造的継承をめぐって」
コメンテーター：吉澤五郎・服部英二・安田喜憲・松本亮三
総合司会：原田憲一

※なお、プログラムに変更が生じることがございます。あらかじめご了承ください。

シンポジウムプログラム

「グローバル文明」と「和」〈やわらぎ〉の思想

2019 年 10 月 12 日（土）13:30～17:00 （501 教室）

パネリスト

牧野英二（法政大学名誉教授）

「平和と世界市民の理念 ―情報化時代の＜和＞の実現可能性」

保坂俊司（中央大学教授）

「グローバル時代に日本文明の叡智を発信する意義　和（やわらぎ）の思想の 21 世紀的意義」

宮嶋俊一（北海道大学准教授）

「和〈やわらぎ〉の思想」を乗り越えて？

司会

加藤久典（中央大学）

平和と世界市民の理念 —情報化時代の＜和＞の実現可能性

牧野英二
（法政大学名誉教授）

本発表の狙いは、グローバル化の進展に伴い複雑化する「不和」の現実を「和」に転換しうる「平和」とその担い手である世界市民の実践的理念の意義及び実現可能性を解明することにある。

グローバル化と情報化が急速に進展した現代は「錯綜した文明化」を生み出し、「文化の多様性」を複雑化し、ハイブリッド化させた。例えば、近年、学問の民生利用と軍事利用との「デュアル・ユース」をめぐる論争が高まり、情報化やＡＩの発展と共に介護ロボットだけでなく、自律型殺人ロボットも登場し、戦争の在り方も情報システムとの連携を深め、無差別テロや「軍事革命」によって変貌した。また、それとともに身体の意味が変容を遂げ、哲学の領域でもケアの倫理や情報倫理は戦争倫理との連携が求められるようになった。さらに急激な気候変動の影響もあり、文明や文化の担い手である身体や生もまた、今日新たな脅威にさらされている。

本発表では、こうした問題群の解決のために、以下の論述順で、「持続可能性の哲学」と今日における＜和＞の思想の意義及び実現可能性を究明する。

まず、拙著『「持続可能性の哲学」への道』で提起した「持続可能性の哲学」の構想を紹介し、この構想と比較文明学の目的及び方法との共通点を明らかにする。次に筆者は、この構想を比較文明学的観点と関連づけ、「和」及び「平和」の意義を検討する。第三に、仏教やカント平和論を手掛かりにして「和」や「平和」を妨げ、不和や戦争の原因となる差別や偏見の克服可能性を探る。最後に筆者は、世界市民主義の概念に依拠して、情報化時代の平和及び世界市民の理念の読み直しを試みる。それによって本発表では、「持続可能性の哲学」及び比較文明学における情報化時代の＜和＞の思想の意義及び実現可能性を究明する。

本発表では、上記の諸課題の検討に当たり、「本質主義」と「社会構成主義」との対立・不和を調停・和解させるための考察方法を採用する。それによって筆者は、「世界市民主義」の理念の理解には、「持続可能性の哲学」の方法的基礎を形成し、全ての文明・文化及び知が関わる「解釈学的循環」の方法が必要なことを明らかにする。要するに本発表は、複雑化した現代におけるグローバル文明を構築する比較文明学とは何か、それは如何にして可能かという問いに対する回答への道を拓く一つの試みである。

グローバル時代に日本文明の叡智を発信する意義

和〈やわらぎ〉の思想の 21 世紀的意義

保坂俊司
（中央大学教授）

AI 技術に支えられた高度情報化社会の到来は、人類社会にバラ色の未来を約束するかのように考えられてきた。確かに現代社会は、個々人がモバイル端末通じて、世界と直接関わり合うことが出来、また膨大な情報や富を一瞬に手に入れることも可能となった。しかし、その一方で、富や情報な格差は極端に広がり憎悪と対立が寧ろ増幅される状況にさえある。

つまり、多様な文化・文明がモザイクのように入り交じり、価値観の流動化を激化させた結果として、現代社会は個人レベルから国家、文明レベルでの混沌状態に陥り、その収束に不可欠な思想的形成に至っていない状況である。

このような価値観の流動化、混乱状態の収拾に向けて、日本文明の存在はどのような貢献が可能であろうか。本発表はそのような問題が基となり、改めに日本文明の現代的意義について考察したものである。

周知のように、地理的・歴史的にユーラシアの東端に位置する日本は、西方（世界各地）からの多様な文明をキルト作品（単なるパッチワークではない）のように、見事に調和、統合させ、独自の文明を形成してきた。そしてその思想の原動力が、調和の思想、所謂「和（わ）」の思想と言われるものであるとすれば、本発表は、この日本的な調和思想、所謂「和」の思想の背後にあり、それを生み出し、また支えてきた更に深い思想として「和（やわらぎ）」思想を想定し、その存在に関して検討したい。

なぜなら、多様で異質な要素を調和させつつ実用的なレベルにまで練り上げ、更にそこに一貫性、つまり文明としての自己同一性を構築すること、即ち異質な文明を取り入れ、独自な文明にまで収斂させることは、単なる妥協や消極的な調和思想では決して実現出来ないからである。つまり、異質な思想、さらには文明を受け入れ、新たな文明形成に至るには、その過程で、対立や混乱が不可避である、と同時にそれらを乗り越え、統合する強い思想基盤が必要だからである。

本発表では、調和〔和〕文明とも云える日本文明の最低流にある、自己犠牲（その精神は、初代ハヤブサの設計にも生きている）を通じて他者を生かす思想的伝統、是を「和（やわらぎ）」の思想と呼び、その典型的な事例として現代の日本社会では、注目されることが少ない聖徳太子の子息である山背大兄王（～643）と、同じくその存在に光が当たることが殆どない光厳天皇（1313～1364）を事例に考察する。勿論、本発表は彼らの顕彰を目的としているのではない。しかし、彼らの行動にこそ日本文明が持つ柔軟かつ強靭な文明の一貫性、自己同一性維持の源がある、と発表者は考える。また、さらにこの「やわらぎ」の思想には、グローバル社会における喫緊の課題である、多様な文化・文明の平和的相利共生社会構築の為の思想形成に大きな貢献が期待出来る要素があると、発表者は考える。そして、その積極的なググローバル社会への発信は、我々に課された義務とさえ考えている。

「和〈やわらぎ〉の思想」を乗り越えて？

宮嶋俊一
（北海道大学准教授）

本シンポジウムのテーマ、「『グローバル文明』と「和」〈やわらぎ〉の思想」に合わせ、宗教研究の立場から発題することが私には期待されている。例えば、次のような話ならどうか。神人離脱や神宮寺の建立、神前読経や本地垂迹説などを紹介しつつ、神仏習合の観点から日本宗教史を辿り、シンクレティズムがその特徴であることを指摘する。他方、西欧におけるかつての宗教戦争やイスラム主義者によって引き起こされた昨今のテロ事件などを例に挙げ、一神教的伝統の排他性や暴力性について述べる。そして「日本の伝統的な宗教性こそが、グローバル化が進む現代において重要な役割を果たすのだ」などとまとめれば、大方の期待に応えることができよう。だが、街中で、またネット上で、国会議員までもが平然とヘイトスピーチを繰り広げ、近隣諸国と友好的な関係を築くことすら困難になりつつある昨今の日本の状況で、このような「日本スゴイ」論を展開することはできない。また、このような排他性がつい最近生じたものだというわけでもない。北海道で暮らし始め、アイヌの歴史や文化に触れる機会も増えたが、アイヌに対する和人の振る舞いは、「融和」や「共生」と呼べるものではなかった。同様のことは、沖縄にも当てはまる。そして、そのような過去が現在にも継承されていることは、今の沖縄を見れば、明白である。

かつて仏文学者の渡辺一夫は「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」と問うた。寛容な相手に対して寛容であることは難しくない。不寛容に対してどう向き合うかこそが問題となる。自らにとっての「不寛容」に対して、自らの「寛容」を押しつけるのであれば、それこそが不寛容となる。「「和」〈やわらぎ〉の思想」にはこうしたジレンマがある。誰かに対して、それを押しつけてしまっては、それは「和」〈やわらぎ〉ではなくなる。だとすれば「「和」〈やわらぎ〉」とは思想の内実ではなく、姿勢や態度のことではないか。自分とは異なる価値観や考え方、行動様式に出会ったとき、自らの価値観や行動様式を相手に押しつけるのでもなく、かと言って、自分を捨てて相手に迎合するのでもなく、違いを認め合いながら話し合いを重ねていく、そういう姿勢・態度こそが、現在求められている「和」〈やわらぎ〉だとして、さて問題は「話し合い」が通用しない相手にどう向き合うかだ。たとえば、2006 年 10 月、アーミッシュ（キリスト教メノナイト派の一派）の児童や教員を銃で殺傷する事件が起きた。その際、自分より小さな子供に銃口が向けられた 13 歳の少女は、「自分を殺して欲しい」と言い、射殺された。彼女を含む５人が殺害されたが、事件後、彼女の祖父は犯人に恨みを抱いていないことを表明し、犯人の家族を葬儀に招いた。ここまでの寛容さを「和」〈やわらぎ〉は持ちうるのだろうか？

伊東俊太郎先生卒寿記念特別講演

□伊東俊太郎先生特別講演

「文明の世界的分布と日本文明の役割」

2019 年 10 月 13 日（日）13:30～15:20（902 教室）

講演者

伊東俊太郎（比較文明学会名誉会長・国際比較文明学会終身名誉会長・東京大学名誉教授）

司会

横山玲子（比較文明学会理事）

□伊東文明学との対話―その顕彰と創造的継承をめぐって

2019 年 10 月 13 日（日）15:30～17:00（902 教室）

コメンテーター

吉澤五郎（比較文明学会名誉理事）・服部英二（同）・松本亮三（同前会長）・安田喜憲（同理事）

総合司会

原田憲一（比較文明学会会長）

伊東俊太郎先生卒寿記念講演

文明の世界的分布と日本文明の役割

伊東俊太郎
（東京大学名誉教授）

日本比較文明学会は、1983 年 12 月 20 日に共立薬科大学において、第 1 回大会が催され、当時国立民族学博物館の館長をされていた梅棹忠夫先生をお迎えして「比較文明論の課題」という特別講演をして頂き、にぎにぎしく創立された。そのとき私は会長に推されたが、以来はや 36 年の年月をけみし、ここに「グローバル文明」と「和の思想」というテーマで、原田会長の下、第 37 回の大会が新設の中央大学国際情報学部で開催されることになったのは、まことにうれしくおめでたい。

ところでこの機会に学会委員会で、伊東が近く 90 歳になる筈だろうから、記念に講演をしてもらったらどうかという話が出たそうで、保坂大会委員長より、その諾否をたずねられた。たしかに私は 1930 年 4 月 25 日の生まれで、大会当日はまだ 90 歳に少しだけ間があるが、それに近いことは間違いない。それに久しぶりに会員の皆様にお会いして、創立以来のさまざまな出来事について話し合うことができるのも大いに楽しいことだと判断し、お引き受けすることにした。

さて、そこで何を講演の主題にしたらよいか考えたが、私がまだやりとげないで心残りになっている問題。つまり、世界中にどのような文明がどのように分布しているのかを、実際に地図上に画き出して、目に見えるようにすることである。これはまだ具体的になされていない。かつて民博でこの試みがなされようとしたが、未完に終わった。これをこの機会に実践してみたいと思う。もちろん最初の試みなので不十分なところは残るであろうが、後の議論のための下地にはなるであろう。それをあえてやってみたい。

世界にいったい、文明の種がいくつかあるのかという基本的なことがらも、こうした試みなしには明確にならない。「文明」の数だけではなく、筆者の考えている「文明交流圏」のこともくり入れなければならないだろう。こうしたことは「比較文明」を論ずるものが、誰でも前提しておかねばならないことだろうが、何よりも筆者自身がまず自分に考えられるものを提示しておかねば、落ちつかない。だから、もちろんこれは 1 つの提示であって、まったくの試論で強制力はない。そして事実こうしたことについては、シュペングラー、トインビー、ハンチントンらによっても、さまざまな説が出されていた。そして私のものも、会員の皆さんが自分で考えるきっかけになればと願っている。と云って今、その地図が出来上がっているわけではない。講演当日までに、検討を続けてなんとかつくり上げるまでである。

今回の大会テーマ「『グローバリズム』と『和』の思想」に関連して云えば、たしかに大会趣旨書にも述べられているように、現代は「グローバリズム」が劇しく進行している時代である。しかしこの「グローバリズム」は単に世界が一様化することではない。またそうあってはならないだろう。世界には歴史を通じて、さまざまな文明が生起し発展して、現在でもこの文明の「多様性」は厳存している。現在進行中の「グローバリズム」は、まずこの文明の「多様性」に目を向け、それを無視するのではなく、むしろそれを生かしながら、その間に調和的な共同体をつくっていくことが重要で、これが比較文明学のそもそもの存在理由（レゾン・デートル）であった筈である。いわゆる「グローバリズム」は、何か一定文明の力によって他をなぎたおして一様化をはかるものであってはならない。か

つての西欧中心主義や現在のアメリカ中心主義のように。

このようなときに当って、日本文明はどのような性格をもち、どのような役割を果たすべきなのか。日本文明はその成り立ちにおいて、単に西洋文明と東洋文明ともいえず、この両者をともにとり入れながら、その間の調和をはかってきたと云える。

これこそ今回のテーマ「和」の日本的伝統をいかに生かしてゆくかという問題とつらなる。この見地から、現代における「日本文明」の役割というものを考察してみたい。

第 37 回大会個人研究発表プログラム

2019 年 10 月 13 日（日）

部会１　座長：小倉紀蔵（京都大学）　【701 教室 9:30～11:00】

神出瑞穂（科学技術・生存システム研究所）	「『生存原理幹思想』による『融和・共生文明』の構築」
YUAN XIN（大阪大学大学院）	「近代における女性用海水着の日本化」
秋丸知貴（滋賀医科大学）	「中心統合構造から中空均衡構造へ――大舩真言《VOID》シリーズを手掛かりに」

部会２　座長：加藤久典（中央大学）　【701 教室 11:10～12:40】〈英語セッション〉

峯真依子（中央学院大学）	American Guide Series and American Diversity
喜多文子（中央大学政策文化総合研究所客員研究員）	Ezra Pound and Noh Plays
Hadiutomo Dwi Anggoro（中央大学）	The expression behavior means imperative and directive in Japanese and its understanding in Indonesian

部会３　座長：佐々木一也（立教大学）　【702 教室 9:30～11:00】

犬塚潤一郎（実践女子大学）	「在るものへの適応という技術の知の検討」
奈良修一（公益財団法人中村元東方研究所）	「釈尊と孔子：枢軸時代のインドとシナ」
小林雅博（立教大学大学院）	「現代文明における『ポスト・ヒューマン』というモティーフについて」

部会４　座長：大森一三（法政大学）　【702 教室 11:10～12:40】

小平健太（立教大学）	「弁証法的倫理学と多文化主義」
テン・ヴェニアミン（京都大学大学院）	「近代ロシア東洋学者の仏教理解に関する一考察」
カク・ミンソク（京都大学大学院）	「1930 年代東アジアにおける思想の媒介ー「無」・「危機」・「実態」」

部会５　座長：汪義翔（東京理科大学）　【801 教室 9:30～11:00】

星野克美（多摩大学名誉教授）	「人新世文明論 ～生物人類絶滅学説と文明研究課題～」
三枝守隆（立教大学大学院）	「シク教の歴史におけるミリタリズム化の現代的意義ーーA・J・トインビー『歴史の研究』に依拠して」
加藤　泰（東海大学）	「ホロコースト、文化的ジェノサイド、パレスチナ」

部会６　座長：濱田陽（帝京大学）　【801 教室 11:10～13:10】

服部匡成（文明法則史学研究所）	「３つの文明サイクル理論の比較～ステファン・ブラハ、トインビー、村山節～」
川口文夫（中部電力[株]顧問）	「『グローバル文明と和の思想』に思う」
横山玲子（東海大学）	「文明とまなざし」
朱捷（同志社女子大学）	「漢字および中華文明の『和』からグローバル文明の可能性を探る」

部会７　座長：島田竜登（東京大学）　　【802 教室 9:30～11:30】

金子晋右（佐賀大学）	「グローバル文明と反近代文明の衝突」
林正博（東京都市大学）	「経済的平等性についての一考察」
横尾紀雄（中央大学政策文化総合研究所）	「オンリーワン企業の条件と源流となる日本の精神文化」
平林豊樹（社会学者）	「社会的カテゴリーは社会科学での重要性を減じつつあるのか」

「生存原理幹思想」による「融和・共生文明」の構築

神出瑞穂
（環流文明研究会：科学技術・生存システム研究所）

①文明の構造を表面にハード・ソフトなど人工物、その内側に各民族（ゲノム人類学的意味の）の文化、そして核の部分が民族精神からなる 3 重構造の球で捉える。「融和・共生文明」とは核になる民族精神同志のふれあいで生まれる。これは AI,IT 技術の進展やグローバル化の進展があろうとも変わらない。
②日本人の民族精神は**「和（やわらぎ)」、「自律心」、「あかき心」、「稜威（いつ)」、「物のあはれを知る心」、「穢れと清め」、「むすび」**という７つの要素からなる原子核モデルのようなシステムと考える。(第 32 回大会で報告)。システムとは部分の集合以上のものであり、**日本人の心の独自性とは、このシステムの振る舞いの独自性**である。心を合わせる、利他心を意味する「和（やわらぎ)」も「自律心」、誠や仁の「あかき心」および「物のあはれを知る心」などの 6 つの要素で味付けられているところに日本人独特の“風味”がある。
③このシステム型民族思想は人類が多神教、一神教、さらには“科学技術教”、“市場経済教”などを信奉するようになる前の、いわば幹細胞のごとき生物としての命の連続性を支えてきた思想（これを**「生存原理幹思想」**と名付ける）である。その意味ではこの思想はシステムの差異はあるものの、あらゆる民族の心の奥に潜在的に存在しており、このことが民族間の相互理解の基盤になり、「融和・共生型世界文明」の実現の可能性を示唆している。
④国連の SDGs ほかを分析すると、文明の“病状”は貧困・格差、人権、極端な民族主義、種の多様性危機など様々だが、根本の共通課題は**人類、生物、ガイアの「生老病死」問題**と捉えることができる。この問題は全世界の課題だが、結局は各民族の**個人の安心、安全で生き甲斐あるトータルライフステージ問題**に帰着する。ここから具体的なこの問題に対する解決や支援が可能になる。
⑤西、南、北からやってきた“渡来人達”が数万年かけて「生存原理幹思想」を育み、日本列島にそれなりに「融和・共生文明」を構築してきた。最近では先の大戦のあとスイスのような平和国家、米国のような豊かな国家、英国のような福祉国家を目指し我が国は 75 年間努力、戦争をせずそれなりの成果を上げてきた。これらの実績と問題点を整理し、少子高齢化の 21 世紀は**「欲望の文明」を卒業しなくてはならない。**すなわち GDP を競うのでも資源エネルギーを奪い合うのでもなく AI を駆使してマネーカルチャー文明をめざすのではなく、**「生存原理幹思想が触れ合う共助型地域共同体」を構築、慈悲心を持って「生老病死」問題に対処する文明を我々がこの日本列島に築き上げて見せる**ことだ。このことが世界の「融和・共生文明」構築への最大の貢献になる。

近代における女性用海水着の日本化

YUAN　XIN
（大阪大学大学院）

近代的な海水浴は 1881 年に、明治政府の推奨によってヨーロッパから日本に導入されたことに始まる。海水浴に行く際に着用する服を「海水着」というが、日本人女性の海水着には、半筒袖と猿股のような和服のデザインを使って作ったものや西洋から輸入した舶来品、また日本人女性向けに改良されたもの、といったバラエティーに富んだものが見られる。発表者による文献調査から、日本人女性の海水着には西洋から輸入した舶来品をそのまま利用したというより、日本人女性向けに改良したり、和服の要素を取り入れたりといった日本化された事例が多く見られる。

本発表は、1900 年代から 1930 年代にかけて女性用海水着がどのように日本化されていったのか、その過程と理由を追っていくものである。なぜこの期間に限定するかといえば、管見の限りでは、女性用海水着の日本化の始まりが遅くとも 1905 年だと判断したからだ。そして、1940 年代に入ってから戦争による物資制限のため、海水着の生産量が減少し、製造が中止されたため、海水着の日本化は一時期見られなくなった。上記の理由から、本発表は女性用海水着の日本化が一番著しい時期、すなわち 1900 年代から 1930 年代までに注目する。ついでながら、本発表における日本化とは、海水着に日本的な物を取り入れることや、舶来品のままではなく、日本人女性向けに改良すること、また作ることを指す。

研究方法と資料は、まず「海水着」に関連する新聞記事(主に『朝日新聞』と『読売新聞』)や雑誌（『アサヒグラフ』や『風俗画報』、『婦人画報』、『婦人公論』、『婦人世界』など)、写真集、広告などを収集し、時代ごとに整理した。その上、舶来品の海水着が日本人女性に合わないため、改良を提唱する言説と改良された海水着のビジュアル資料を抽出し、分析と考察を行う。

中心統合構造から中空均衡構造へ
――大舩真言《VOID》シリーズを手掛かりに

秋丸知貴
（滋賀医科大学非常勤講師）

心理学者の河合隼雄は、ユングの分析心理学の成果を踏まえつつ、古来日本文化の深層には「中空均衡構造」があることを指摘している。これは、河合が『古事記』における三貴神の内、太陽女神アマテラスと英雄男神スサノオの間に月女神ツクヨミが無為に存在していることなどから着想を得て、西洋文化の深層にある一神教的な「中心統合構造」の対比概念として提出したものである。

ここでいう「中心統合構造」は、中心に強大な権力が存在し、それが周囲の万物を支配的に統合する構造である。そこでは、自然よりも人為が重視されると共に、周囲の万物は魂なき分析対象と見なされ、理性的・論理的な善悪の判断を下されて、異物は完全に排除されることになる。こうした心性が、近代西洋において人間の自然に対する要素還元主義と仮説検証実験を徹底させ、科学技術を飛躍的に発達させたと考えられる。

一方、「中空均衡構造」は、中央には実質的な権力は存在せず、それにより周囲の万物同士が均衡し合う構造である。そこでは、人為よりも自然が重視されると共に、周囲の万物は魂を賦活され、感性的・美的な共感や調和が重んじられて、異物でさえ包含されることになる。こうした心性が、新しいものを受け入れやすく古いものも残しやすい「日本文化の雑種性」（加藤周一）をもたらし、日本が東洋でいち早く西洋的近代化を達成できた要因であると推定される。

こうした「中心統合構造」と「中空均衡構造」には、どちらにも一長一短がある。しかし今日、「中心統合構造」が発達させすぎた科学技術が致命的な自然環境破壊を発生させている現状では、その行き過ぎに歯止めをかけるものとして「中空均衡構造」には見直される価値がある。また現在、異質な人種や文明を排除し合う国際対立が激化している状況では、異物への寛容性を示す「中空均衡構造」の有効性は注目されて良いだろう。

こうした「中空均衡構造」を象徴的に表現する現代日本のアーティストとして大舩真言（1977 - ）がいる。彼の《VOID》シリーズは、和紙に群青の岩絵具で円環状の抽象造形を描き、渦を巻く中央が微光を発しているように見える絵画作品である。この《VOID》が京都の上賀茂神社やパリの聖メリー教会で展示された時には、空間が再聖化（リ・エンチャンティッド）されるような芸術効果が生じていた。本稿は、現代美術を通じて日本の伝統的心性を改めて考察する試みである。

American Guide Series and American Diversity

Maiko MINE
（Chuogakuin University）

In the Great Depression era, Works Progress Administration provided the white-collar unemployed with public art projects, under the banner of Federal One, which included Federal Art Project, Federal Theater Project, Federal Music Project, Federal Writers' Project (FWP) and so on. As part of the FWP, more than 6,600 writers/would be writers set out to compile the American Guide series, many of whom later became acclaimed American writers.

The aim of this study is to explain the background in which the FWP needed to initiate the American Guide series on public enterprise based on the context of the "See America First" campaign held in previous decades, as well as that of a mobile revolution with the launch of the T-ford automobile that dramatically transformed the American landscape. Then, this study will analyze one outstanding feature of the guidebook: introducing diverse people living in various cities throughout the United States, and describing their lives vividly for the benefit of readers or travelers.

The guidebooks, thus, not only showcase general sightseeing spots, but also depict ordinary people's lives in an interesting manner. For example, the episodes of factory workers and lives of minority groups are juxtaposed with those of celebrities such as Davy Crocket and John Rockefeller in the same amount of volumes of depictions. The guidebooks are meant to let the voices of Americans belonging to different ethnic groups and classes (who were never taken into account as a national identity before) be heard to celebrate American diversity.

Rethinking diversity may sound a little clichéd, but it is still a very relevant topic, with the United States becoming increasingly divided. This study re-evaluates the guidebook series where the FWP focused on American diversity.

Ezra Pound and Noh Plays

Yoshiko Kita
(Chuo University)

The Western interest in Japan has been rapidly aroused ever since Japan opened to the world about 150 years ago. It is widely acknowledged that Western artists were fascinated by unique Japanese art. From a viewpoint of recent Japonisme research, one of the ukiyo-e artists, Katsushika Hokusai had great influence on the entire range of Western art forms. Likewise, Japanese literature including haiku has been highly appreciated since it was introduced into the West around the Japonisme period. However, unlike the case of Japanese painting, it is not well known that it has exerted a considerable influence on Western literature. For instance, as for Noh plays, it seems that the issue of how it was introduced into Western literature at the beginning of the 20th century has been hardly discussed so far especially in Japan.

Therefore, in my presentation, I will examine how Ezra Pound (1885-1972), who is one of the greatest modern American poets, translated Japanese Noh plays into English as literature based on Ernest Fenollosa's manuscripts which Pound acquired in 1913. In my discussion on Pound's Noh translation, I will explicate how Noh play made a significant contribution to Pound's modernist poetics. Amongst several Noh plays translated by Pound in *'Noh' or Accomplishment, a Study of the Classical Stage of Japan* (1916), I will examine "Kakitsubata" and "Suma Genji" to show the importance of Pound's translation of Noh plays.

The expression behavior means imperative and directive in Japanese and its understanding in Indonesian

Dwi Anggoro Hadiutomo
（Chuo University）

This article contains a brief study of the field of linguistics related to the use of sentence pattern show instructions, prohibitions, commands, and aspirations in Japanese language and how they are understood by Indonesian. People use a language in their daily activities, often interact with each other in a sentence pattern that shows their meaning, and especially from a foreigner's perspective, foreigners often find ambiguity regarding the sentence pattern used. That is, use of a pattern indicating a specific meaning. There are several types of expression patterns in Japanese and Indonesian patterns, such as indication, prohibition, command, desire etc. In the use of language by a group of people, a sentence issued by a person not only depends on the internal elements of the language rules, but also always related to the situation and culture of his community. Their language use and language understanding are not only base on the structure of the language used for the language, but also on the behavior of the society such as the culture and customs of the society that uses the language. Data photographs containing text are taken mainly in public places in Tokyo in the form of stations and outdoor stations. The first approach used in linguistics is sociolinguistic theory combined with the study of meaning in linguistics and morphological theory. From this research, the expression patterns most commonly used for instruction and prohibition, and how the meaning of utterances and situations arises from the use of each of these expression patterns, can be seen. In addition, it seems interesting how foreigners, especially Indonesians, are read the sentences with imperative and directive meaning in terms of indications, prohibitions, orders, and desires, and how they respond.

在るものへの適応という技術の知の検討

犬塚潤一郎
（実践女子大学）

現代文明の危機の本質的構造の把握とその克服の道を、技術の本質へ問う立場から検討したい。ここで技術とは西洋起源の一つの知のあり方をさすものであるが、その歴史的な概念と現代の科学技術観との比較にまず着目したい。

アリストテレスはエピステーメーεπιστήμη とテクネーτεχνη を、どちらも真理を解明することとしつつも、真理を明らかにする仕方の違いにおいて区別している。対して現代では、科学と技術 science and technology あるいは基礎と応用 basic and applied、また技術と工学 technology and engineering などの区別が実際上不分明なものとなっている。むしろ日本語の科学技術という言葉に表現されるような、包括的で相互関係的な動的ありようこそが、現代の技術の様相として現前しているといえよう。

そして、使用する言語の違いが必然的に異なる人間観・世界観を人にもたらすように、技術もまた価値中立的なものではなくて、対象の把握の仕方、人間との関係構造、すなわち世界観・人間観を必然的に伴うと考えられる。ハイデッガーはその意味で、現代の技術の本質を、一切を用立てられうるようにあるもの（用象 Bestand）として現前させると論じた。

ここでもう一度古代ギリシア思想に戻れば、技術(τεχνη, techné／ποίησις, poiesis, 制作)は、ミメーシス(μίμησις, mīmēsis)という芸術理論、つまりイデアの模倣・分有（プラトン）や、起りえること（可能的世界）の模倣を通じた普遍の提示（アリストテレス）に論じられ、作者の主体性（天才）を起源とする創造 creation という現代の芸術概念との違いにあらためて気づかされる。

さらに今日では、「経済－技術－科学」産業体制と社会の市場経済化との結びつきと拡大、さらに自然と社会の限界への意識とが、この創造概念をさらに適応 adaptation（動的な最適化過程）へと変質させていることも明らかである。

応じて市場拡大の経営手法も、一方的な生産―消費モデルから、近年のサーキュラー・エコノミー論（環境制約下の産業経営理論）の現れなど、多重の円環的モデルへと移行しつつある。このような現象の基礎に、アクターネットワーク論の提起するような、連関としての現象記述に徹する態度を見ることもできよう。

このような比較を通じて、「見えないものの実体化による永遠の現実化」から「あるものへの適用・最適化による現実の永続化」へ、という技術知の転換を見て取り、今日の科学技術批判への基礎的視点を提起することが本論の論じるところである。

釈尊と孔子：枢軸時代のインドとシナ

奈良修一
（公益財団法人中村元東方研究所）

伊東俊太郎先生は、人類史に五つの転換点があり、それは、人類革命、農業革命、都市革命、精神革命、科学革命であるとされている。そのうちの精神革命は、カール・ヤスバース（Karl Theodor Jaspers、1883 - 1969）の言う「枢軸時代」(Achsenzeit)とも重なるのものである。

近代文明が様々な行き詰まりの状態を見せている現在、改めて人間として「如何に生きるか」が問われている。この精神革命（枢軸時代）の成果を再確認することは、近代文明が見落としてきた、あるいは、軽視してきた部分を明らかにすることができると思われる。

近代文明は、マックス・ヴェーバー（Max Weber、1864 - 1920）が、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus)で指摘したとおり、プロテスタンティズムの、ある意味「非人間」的な、思想・文化が元にある。この文明が行き詰まっていると言うことは、それ以外の思想に基づく新たな文明思想・文化が必要であることを意味している。紀元前 5 世紀から現在にまで息づいている、仏教、儒教の思想をその創始者にまで遡って、再検証することはその需要に対する一つの答えである。

インドで生まれた釈尊とシナで生まれた孔子は、どちらも紀元前 5 世紀を中心に活躍した人物であるが、この時代はインドもシナも、分裂した時代であり、伝統的な価値観がある意味否定され、新しい様々な思想が生まれてきている。その中から、両者は現在まで生きつづけてきているのである。

本論では、釈尊と孔子の残された言葉を比較していく。仏教の創始者である釈尊の言葉が記されているという『スッタニパータ』(Sutta Nipāta)と、同じく、シナで生まれた儒教の創始者である孔子の言葉が記されているという『論語』に焦点をあてる。どちらも紀元前 5 世紀の人間の言葉であり、後世の手が入っているとはいえ、その時代の資料と考えることができる。この両者の資料を比較することにより、インドとシナの文化、文明の違いをあきらかにすることができ、その違いを明らかすると共に、その根底にある、「如何に生きるか」という問いに対する答えを導き出すことができよう。本発表が目的とすることは、近代文明に必要とされる要素を明示することである。

現代文明における「ポスト・ヒューマン」というモティーフについて

小林雅博
（立教大学大学院）

現代文明は現在、多様な領域において、これまでの文明的営為では対応できない新しい事態を迎えようとしている。まず、自然環境の領域では、Ｐ・クルッツェンとＥ・ストーマ―が 2000 年に「人新世」(Anthropocene)という新しい地質学的時代区分を提唱し、「人新世」における人類の生存の困難を科学的に提示した。テクノロジーの領域では、AI が人間知性を超えて労働・経済・生活などを根底から激変させる「シンギュラリティ」(技術的特異点)の問題が活発に議論されている。また、近年の思想的領域においては「思弁的実在論」とその周辺に位置する哲学者や思想家たちによって「人間が不在となった世界」や「絶滅」といった問題系が主題的に論じられている。本発表では、現代文明における諸現象のなかに垣間見られるこうした新しい危機の形態(史上六回目の大量絶滅、ポスト・ヒューマンなど)を概観したあとに、こうした新しい危機のインパクトがとくに現代文明の思想的領域に対してどのような影響を与えつづけているのかということについて検討する。

弁証法的倫理学と多文化主義——ガダマーのプラトン解釈と開放性（Offenheit）の理念

小平健太
（立教大学文学部・社会学部兼任講師）

本発表の目的は、政治理論および文化理論における解釈学的転回の様相を「弁証法的倫理学」の観点から究明することにある。それにより、我々を取り巻くさまざまな文化的側面に随伴する「多様性」および「多元性」の概念を「弁証法的倫理学」の観点から理解することで、その思想的立場が今日における「多文化主義」および「多文化共生」の問題圏における他者理解の理論に対して持つ哲学的意義を明らかにする。

「多様性」および「多元性」といった概念は、一方で自然科学的な知および技術が革新的な進歩を遂げるなかで人間の文化的存在様式の問題として、あるいは他方で、人間社会の存立基盤にかかわる問題として、次第にまた着実にその理解が進められてきた。この点に関してドイツ人哲学者であり、解釈学哲学の泰斗であるガダマー（H.-G. Gadamer, 1900-2002）もまた、「言語」という超越論的条件によって規定される存在者としての人間の「生」の複数性および多様性を、彼独自の弁証法的倫理観のもと擁護してようとしてきた思想家であった。

そこで本発表では、長年にわたり行われてきた彼のプラトン解釈を精査することで、彼の弁証法的倫理観の形成過程そのものをともに辿ることから始めたい。ガダマーはプラトンの『ピレボス』についての一連の解釈において、存在の分有問題をめぐり「倫理的なもの」と「美的なもの」との等根源性を主張する。「倫理」のいわば「美的化」（Ästhetisierung）より導かれるこの等根源性は、換言すれば、人間存在の「倫理」と「行為」の等根源性、ひいては存在の多様性と統一性の等根源性とも言えるものであり、この点を明らかにするのが第一節および第二節である。続く第三節では、こうした美的化の働きが言語的経験におけるロゴスの「開放性」（Offenheit）に根ざすものであることを明らかにする。ロゴス的位相に媒介された弁証法的・思弁的経験において、善の理解とは、「より善い理解」（besser verstehen）ではなく「別様の理解」（anders verstehen）として、常に他なるものに「開かれている」（＝開放性）ことに最大の意義がある。そして最後では、こうした弁証法的倫理観のもと政治理論および文化理論における「解釈学的転回」の様相を慎重に見極めることで、今日における多文化主義の問題圏における弁証法的倫理学の意義を哲学的に明らかにすることにする。

近代ロシア東洋学者の仏教理解に関する一考察

ヴェニアミン・テン
（京都大学大学院博士後期課程）

ヨーロッパにおいて、学問分野としての仏教学は 19 世紀初期から始まった。19 世紀にフランス・ベルギー、イギリス・ドイツ及びロシアの 3 つの主な仏教学のスクールが徐々に形成され、これらのスクールは 20 世紀前半まで仏教学の優位を占め続けた。本発表において、ロシア仏教学のスクールは如何なる性格を持つかを明らかにする。具体的に、著名な近代ロシア東洋学者である F.シチェルバツコイ、O.ローゼンベルク、G.ポメランツの仏教へのアプローチを中心に、その仏教理解の分析を行う。

近代ロシア仏教学の創始者であるフョードル・シチェルバツコイ(1866-1942)は仏教に対する西ヨーロッパの方法論を厳しく批判し、仏教教学を哲学的に翻訳・解釈する新しい方法論を打ち出す必要があると強調した。インド及びチベット文献に基づく彼の労作は当時のヨーロッパ中心の発想に基づいた仏教研究は大きな打撃を受け、理論的アプローチに変革をもたらしたと言われている。本発表において、とりわけ、『中論』の「空」に対する彼の相対主義的解釈と『倶舎論』の「法」の理解に焦点を当てる。

シチェルバツコイの弟子であるオットー・ローゼンベルグ（1888-1919）は師と同じように、19 世紀と 20 世紀の初頭に支配的だったヨーロッパ中心の文献主義を強烈に批判し、仏教教学を体系的に研究する上、哲学的解釈は必須条件であると考えた。5 年間の日本留学以降、彼は中国及び日本文献に基づく『仏教哲学の諸問題』(1918)を書いた。本発表において、仏教の重層性、超絶的任持者としての「法」、仏教の時間論などのローゼンベルグの思想について論じる。

ローゼンベルグは西洋における禅仏教研究者の 1 人でもあった。彼の死後、1950 年代まで入るまで禅仏教はロシア・ソ連学術会において再びあまりなじみのない学問領域になった。次に、禅仏教研究のための重要な試みを成し遂げたのはソ連・ロシア東洋学者、思想家であるグリゴリー・ポメランツ(1918-2013)であった。鈴木大拙の著作を中心に扱った彼の著書『東洋の宗教的ニヒリズムにおけるいくつかの潮流』(1968)は、ソ連学術界における最初の禅仏教研究となった。本発表において、中世インドの仏教消滅の要因、禅仏教に対するロシア記号論的アプローチと否定の論理学などのポメランツの理論について論じる。

1930 年代東アジアにおける思想の媒介―「無」・「危機」・「実体」

カクミンソク
（京都大学大学院人間・環境学研究科）

東アジアにおける近代の歴史は、相互協力、連帯の歴史であったというより、相互反目、闘争、葛藤の歴史であったといえる。そのような葛藤は、１９１０年の日韓併合、１９３１年の満州事変、１９３７年の日中戦争と続く一連の歴史的事件によって激化した。このように、近代における東アジア諸国の相互交流は、植民地支配や戦争という極めて暴力的な形で行われたのである。従って東アジアの近代を見る視線も、そういった悲劇を招いた主体の責任を問う方向に傾いてきた。しかし、いかなる行為であれ、その行為が成立するためには、その行為を行使する主体と、その行為が行使される主体の両方が必要である。つまりいかなる行為も、二つの主体の共同作業である。ある行為を二つの主体の共同作業として捉える見方は、主体同士の相互影響関係を重視する観点に繋がる。暴力も例外ではなく、その暴力の本質を明らかにするためには、暴力を行使する側と、される側の相互作用に対する目配りを要する。また暴力が二つの主体の相互作用であれば、もはや暴力を振るう側と暴力を受ける側という二分法は成り立たない。相互作用はその元々の意味からして、一方的な影響関係ではなく、お互いがお互いに何らかの影響を与え合う関係を指しているからである。

本発表は、以上の方法論に基づいて、１９３０年代の東アジアの行為主体（日・中・韓）の相互作用を、東アジアにおける思想の展開過程に注目しながら捉えることを試みる。１９３０年代という時期を重視する理由は、植民地支配や戦争を媒介に、東アジア諸国の相互摩擦が激化した時期であったこと、また、１９２０年代の世界恐慌や西洋没落言説の流行を経て、東アジアの相互影響が一つの新しい文明論を標榜しながら進められたことにある。植民地支配や戦争という媒介と当時提唱された新しい文明論の重視は、それらに対する肯定的な評価を意味しない。むしろ本発表の目的は、それらに対する評価を判断中止し、東アジアの諸主体が相互媒介していく様相を、それらの契機を通じて描いてみることにある。

具体的に取り上げる思想は、三木清の「東亜協同体論」やそれの源流としての京都学派の「絶対無の哲学」、植民地朝鮮における朴鍾鴻や朴致佑の「危機の哲学」、また胡適や馮友蘭の「中国哲学史」の思想である。一見無関係に見えるこれらの思想は、植民地支配や戦争という契機を通じて相互媒介の関係をなしていたのである。

人新世文明論 ～生物人類絶滅学説と文明研究課題～

星野克美
（多摩大学名誉教授）

★工業文明は、石油資源・金属資源の枯渇でその成立基盤を喪失し、2050～60 年代に滅亡する可能性がある。(2015 年比較文明学会大会個人研究発表済み)
★それに加えて、人為の影響で地球地質構造が激変する新たな地球地質時代に入ったとする「人新世」学説が、P.Crutzen&E.Stoermer によって 2000 年に提唱された。これに呼応して、CO2 排出量急増による生物絶滅・人類絶滅（「6 度目の大絶滅」）を警告する世界最先端の「学際研究」が、地球地質学/地球気候考古学/生物絶滅学/哲学/文化人類学などの分野で急速に広がっている。
★人新世/地球環境考古学/生物絶滅学などの学際研究の諸学説を精査して、「生物人類絶滅仮説」を検証すると、①現在の CO2 濃度は 400ppm 超と過去５回の生物絶滅期の 290ppm を上回り、②IPCC の「第 5 次評価報告」の予測では「2100 年 CO2 濃度 900ppm」、「2250 年 CO2 濃度 2000ppm」に達して、過去の絶滅期の 290ppm を大幅に上回り、③気温も「2100 年 4.8℃上昇」（1850 年比）、「2250 年 12℃上昇」するが、④植物の光合成活動が気温レベル 35℃で頭打ち（40℃で停止）、哺乳類の生命機能限界が気温レベル 35℃（6 時間限度）とされるため、⑤今世紀後半の高濃度 CO2 と高気温レベルでは植物・哺乳類の生命活動や生存が困難になり、「人類も絶滅可能性がある」という推論仮説が導かれてくる。
★最近の世界の研究界では人類・文明の近未来像について、①2050 年に文明終末・人類生存危機が始まる（D.Spratt&I.Dunlop）、②人類は 2050 年 40 億人に半減、2100 年 10 億人と絶滅寸前へ減少する（P.Chefurka）、③2100 年までの過程で人類絶滅が始まる（D.H.Rothman）、といった厳しい見解が台頭している。
★そうした諸仮説から、工業文明が文明史上の「最終文明」となり、現世人類がホモサピエンス史上の「最終人類」となる「人類文明最終学説」が必然的に浮上してくる。そのため、①そうした事態を精査する「滅亡絶滅検証研究」、②滅亡絶滅に対抗する「文明存続人類生存研究」などが喫緊の課題となってくる。
★そこでは、①絶滅哲学・絶滅文明学、②ホモサピエンス本性解体論、③工業文明滅亡構造解体論と共に、④先住民文化・野生の思考の自然共生世界観構築、⑤後世人類の生存延命実践研究、⑥先住民文化の叡智活用による生存方策実践研究といった、「最終人類・最終文明」に抗する文明研究の諸課題が想定される。

シク教の歴史におけるミリタリズム化の現代的意義
―――Ａ・Ｊ・トインビー『歴史の研究』に依拠して

三枝守隆
（立教大学 文学部比較文明学専攻科）

シク教はナーナク(1469-1538)によって創始されたヒンドゥー教とイスラム教の影響を受けた非暴力の宗教だった。ところが政治権力や他宗教からの迫害に耐えかねて、第 6 代グルのハル・ゴヴィンド(在位 1606-45)は、教団の中に軍隊をつくり、さらに第 10 代グルのゴービント・シング(在位 1675-1708)は、その教義においても軍事力による護教を正当化した。それによって教団は物心両面で“暴力装置”を制度化したのである。ムガル朝が弱体化すると教団は広大なパンジャブ地方の各地域の支配者となり、その一地域の支配者だったランジート・シング（在位 1801-1839）はシク王国を樹立さえした。

ここで注目すべきは、教団が配下の住民にシク教を熱心に布教したにもかかわらず、現代でもその人口（現代のパキスタン領とインド領のパンジャブ地方の約 7 千万人）の 2 割以下しかシク教徒に改宗していないという事象である。

このような事象、すなわち支配者が配下の住民に宗教を強要した場合、その宗教が人々の魂を掴んでいたのか、という問題は、『歴史の研究』では他の十数の文明における例の一つとして検証されている(1)。宗教を、政治的支配層の力によって、上から下へ押しつけることは可能であり、正統であるという考え方は、現代でも多くの宗教的指導者が抱いている。シク教団の場合は、もし非暴力主義を貫徹していたならば教団は消滅したであろう。生き残ろうとすれば、教団自身がミリタリズム化(2)しなければならなかったのである。しかし、ミリタリズムを許容するような宗教は、人々の魂をとらえることはますます困難になるのではないか。というのも、このネット時代にあっては、人々の他の宗教や思想へのアクセスが、いかなる地域に居ても加速度的に可能になりつつある。自身の意思で宗教を再選択する機会も増えるであろうから。

(1)『歴史の研究』経済往来社。第 11 巻（1939＝1970）; 115-214 頁。章題は「『国の属する者に宗教も属する（Cujus regio,ejus religio）』というのは真実か」。

(2)軍国主義よりも広義の概念。「おもに政治上の諸問題について、それを解決するのは究極的には力である」という思想を肯定する立場。詳しくは、トインビー『戦争と文明』1950=[1959]2018、中央公論新社。

ホロコースト、文化的ジェノサイド、パレスチナ

加藤　泰
（東海大学）

「ホロコーストという歴史的災厄は、生き延びたユダヤ人をヨーロッパから押し出し、パレスチナにイスラエルという新しい国家を生み出すことになった」。この言説はもちろん真実を含んでいるが、ホロコーストといういわば「絶対的暴力」を一方に置くことで、他方のイスラエル国家の「暴力」を見えにくくする働きをすることも否定できない。確かにイスラエルはホロコーストによって行き場を失ったユダヤ人の避難場所となったが、パレスチナにユダヤ民族の国家を建設することは 19 世紀末からのシオニストたちの植民プロジェクトの最終目的であり、ホロコーストが起点となったわけではない。国家建設を最優先するシオニストにとって、ホロコーストは―ゲットー蜂起を除いて―むしろ「遠くの破局」でありイスラエルに住むその生存者は「不在の現存者」だった。しかし、アイヒマン裁判を通してホロコーストの記憶はイスラエル国家の記憶に組み込まれ、ユダヤ人のアイデンティティの一部となった。この記憶はイスラエルが敵対的アラブ諸国とパレスチナ人に包囲され（ナセルやアラファトがヒトラーと同一化される）、常に破壊と絶滅の危機に晒されているという強固な認識図式を支えてきた。アラブ諸国との戦争での先制攻撃やパレスチナ人の暴力に対する過剰な報復はこの認識図式の内で生じている。シオニストのプロジェクトにおいてホロコーストは中心的象徴として機能してきたのである。

シオニストがホロコーストを、ユダヤ人そしてイスラエルのアイデンティティと排他的に結びつけるのに対し、ポーランド出身のユダヤ人法律家、ラファエル・レムキンはこの暴力を人類史的文脈へと開いた。彼は 1933 年に集団虐殺と文化破壊をそれぞれ「残虐行為」（barbarity）と「破壊行為」（vandalism）として犯罪化することを提唱したが、ナチスによるヨーロッパの占領が進む中でこの二つの概念を「種族・部族」を意味するギリシャ語 *genos* と「殺害」を意味するラテン語 *cide* を組み合わせた genocide という造語を用いて統合した。レムキンが設立直後の国連で成立に全力を傾けたジェノサイド禁止条約は、普遍的人権宣言が採択される前日に国連最初の人権条約として実現した。しかし、ジェノサイドを構成する手段とレムキンが考えた「文化的ジェノサイド」は、第二次大戦後もなお植民地の保有に固執した大国の強い反対によって条約から削除され、ジェノサイドは身体的破壊にのみ適用された。ジェノサイド条約もレムキンの名も長い間ほとんど忘れられていたが、集団虐殺が続出する二十世紀の終わりからその重要性が再認識されるようになった。それとともに、文化的ジェノサイドをめぐる議論も再浮上したのである。

この報告において私が行いたいのは、文化的ジェノサイド概念の意義を検討し、ホロコーストがむしろ見えにくくするイスラエルによるパレスチナ人への暴力を、入植者植民地主義の下での文化的ジェノサイドの継続するプロセスという概念化によって照らし出すことである。

３つの文明サイクル理論の比較

～ステファン・ブラハ、トインビー、村山節～

服部匡成
（文明法則史学研究所）

ステファン・ブラハ（Stephan Blaha）は、アメリカの物理学者であるが、トインビーの文明サイクル理論に対して、社会水準を任意に数値化し、数式を用いてグラフ化した理論を提唱した（『A Unified Quantitative Theory of Civilizations and Societies』）。

トインビーは、文明には、発生、成長、挫折、解体（動乱時代、世界国家）というパターンがあるが、他の社会体の影響がなければ動乱時代・世界国家とも約 400 年間となる傾向があり、解体期は「敗走－立ち直り－状態悪化－立ち直り－状態悪化－立ち直り－状態悪化」という三泊半のリズムであることを示した。

ブラハは、文明の開始以降、社会変化に対する抵抗力により、モデルのパターンでは、社会水準の変動幅は時間経過につれ小さくなるが、社会の構成要素（階層）をリーダー、フォロワー、アウトサイダーに分類した分析においては、アウトサイダーの影響が大きくなるほど時間経過による社会水準の変動幅が減少しないことを示した。

村山節の文明サイクル理論（文明法則史学）には、「文明の創造活動の活発さ・創造物の量」という視点から捉え、高調期（創造活動の活発な時期:約 800 年）と低調期（創造活動の活発でない時期:約 800 年）にパターン化したＣＣ（文明サイクル）という概念と、「国家を統制する政治体制＝秩序の体制構築から体制解体に至る盛衰過程」という視点から捉え、興隆期、高原期、衰退期という区分でパターン化したＳＳ（Social System）という概念がある。

ブラハの理論と文明法則史学について、文明法則史学のＣＣすなわち「高調期及び低調期」とブラハの「動乱時代（Time of Trouble)、世界国家(Universal State)」の時期を具体事例（ヘレニック、西欧、日本、中国など）で比較した結果、概ね高調期（創造活発）≒世界国家、低調期（創造停滞）≒動乱時代という傾向が見られたが、例えば春秋戦国時代という動乱期における中国思想の根幹たる諸子百家の発生や創造停滞期における鎖国による平和といった不一致事例が見られた。

また、文明法則史学のＳＳすなわち「国家を統制する政治体制＝秩序の体制構築から体制解体に至る盛衰過程を興隆期、高原期、衰退期と区分したもの」とブラハの「Rout（状態悪化)、Rally（立ち直り)」の時期を具体事例（ヘレニック、西欧、日本、中国など）で比較した結果、概ね興隆期（体制形成）≒Rally、衰退期（体制解体）≒Rout という傾向が見られたが、状態悪化しながらも体制が形成されている場合などの不一致事例が見られた。

「グローバル文明と和の思想」に思う

川口 文夫
（中部電力株式会社 顧問）

梅棹忠夫は文明の変革を生態学上の概念、サクセッション(遷移)で説明している。オートジェニック(自成的)か、アロジェニック(他成的)かである。

日本における文明の変革、明治維新はオートジェニックか、アロジェニックかは見解が分かれるところであるが、私は徳川幕藩体制の弱体化もあるが、海外情報の伝播の影響によるアロジェニックサクセッションであると考える。

明治の初頭福沢諭吉は「学問のすゝめ」や「文明論之概略」で日本国民の精神の発達を啓蒙し、又渋沢栄一など実業人の先駆的努力も相俟って日本は急速に西欧諸国並の国家レベルになった。

昭和の時代になって、梅棹忠夫は比較文明的視点から「文明の生態史観」を著わし、その中で日本を西欧諸国と並ぶ高度文明国と見做し、ソ連、中国、インド、中東諸国などを第二地域に分類したのに対し、日本を第一地域に分類している。

グローバル文明を考える時、共同体体制を考えざるをえないが、ヨーロッパは、第一次・第二次大戦の帰結から共同体化を選択しＥＵ体制となっている。しかし現在、ＥＵもイギリスの離脱の動きなど決して一枚岩とは言えない不安定さが顕在化している。

一方もともと移民国家であったアメリカ合衆国も保護貿易化、他国からの人民流入阻止強化などグローバル文明への反動の動きが顕著であり、さらには中国の巨大国家化も合わせて国際政治環境は課題が大きい。

高度な科学技術に支えられたグローバル文明は、機能においては人類に多大の奉仕をしているが、国家間の摩擦と紛争の種を内蔵した危うい文明でもある。

日本の古代国家統一の歴史を振り返ってみると、日本古代文明は、イラン、インド、西アジアに源流をもつ複雑な系譜のアロジェニックサクセッション文明であり、中村元博士の言葉によると『ある文化圏全体にわたって統一を図るためには、「和」の精神が強調される』とあり、聖徳太子の憲法十七条もその具体化である。

第一次大戦後、ドイツの歴史家マイネッケは、「近代史における国家理性の理念」を著わし、国家の本質について徹底的な考察を残している。

今、グローバル文明の未来を考える時、グローバル文明の「理性」が不可欠だと考える。福沢諭吉の言を借りれば、地球大の国家為政者の理性がグローバル文明を担保すると考える。

日本文明の基本精神であった「和」の精神がグローバル文明の理性となる道はないかと思う。

文明とまなざし

横山玲子
（東海大学観光学部観光学科）

現代文明が抱えるさまざまな問題を考える時、我々はごく当たり前のように「自然」ということばを使う。1960 年ごろから文化人類学者たちが考察し始めたことは、西洋近代科学的思考における「自然」概念は、決して普遍的なものではない、ということである。自分あるいは自集団と、それらを取り巻くすべてもモノ・コトに関する認知や理解は、じつにさまざまな形態をとって表されているからである。同時に文化人類学者たちは、なぜ、西洋的な思考をもつ人々が、文化人類学的調査研究の対象になってこなかったのかという疑問も投げかけている。

極端すぎるほど経済に偏重する現代社会はいかなる文明を形成しているのか。現代文明ということばの中身を知ることは容易ではないが、それでも、西洋近代科学の発達と密接に関わっており、やがてこの文明はいつの間にか、人間の手を離れて独り歩きを始めた。地域性をもたないメタ文明（松本亮三 1995）の誕生である。

人間は、個人にしろ集団にしろ、自らを取り巻くあらゆるモノ・コトに対して、まなざしを投げかけている。そのまなざしは、個人的な感情・感性・感覚に基づくものもあるが、多くの場合、その個人が属する集団の中で共有されている価値観に基づく。「自然」という概念が普遍的ではないのは、そのためである。では、地域性をもたないメタ文明の中で暮らす人びとは、どのようなまなざしをもっているのだろう。換言すれば、「共有されている価値観」とは、何だろうか。

かつてレヴィ＝ストロースは、「私たちの社会はしだいにその骨格を失い、断片化し、その成員としての個人を交換可能な、無名の原子の状態におとしめてゆくとさえいえるでしょう」と説いた。無名の原子たちであれば、まなざしをもつことも、まなざすことも、ないのだろうか。ただただ前例に倣っておけばよい、専門家に任せておけばよい、という、精神的な熱さのない、無関心で無気力なことばを聞くことが多くなったようにも思う。

本発表では、主に先住民社会にみられる「まなざし」と先進国にみられる「まなざし」とを比較検討してみたい。現代文明のもつ本質的な問題を、あらためて考え直すためである。

漢字および中華文明の「和」からグローバル文明の可能性を探る

朱　捷
（同志社女子大学）

漢字「和」の本字は「龢」、左側の「龠」は複数の管からなる吹奏楽器の形に由来する象形文字であり、本来は管楽器の笙を指していたとされる。そして音を調和させる音楽は、古代中国において、天地宇宙の調和を象徴するばかりでなく、「治世の要」（『呂氏春秋』）とされていたのである。

『春秋左氏伝』には、斉の景公の「和と同が違うのか」の質問に対する晏子の答えがみえる。声（音楽）は、清濁・大小・長短・疾徐・哀楽・剛柔・遅速・高低・出入・疎密などが相たすけ調和するものである。君子がそれを聞いて心が静まり、静まれば徳（政治）が和になる。もし水ばかりでスープを作れば誰が飲めるのか。もし琴瑟が同じ調べで奏でれば誰が聞けるのか、と。

ここで音楽をたとえに理想の政治が語られている。さまざまな音を音楽のように調和させるのが「治世の要」とされるが、そのような政治がもっとも実現されたと考えられるのは、周王朝（前 1056～前 256）の前半である。そこで、「天下」という理念のもとに、「万邦」が「協和」（『尚書』）する世界がみられたとされる。

周王朝の政治空間を地球規模に拡大すれば、今日のグローバル社会である。そして、周王朝の「万邦」が異なる民族や部族、文化を意味していたとすれば、それに置き換わるのは、今日地球上に存在するさまざまな異なる文明にほかならない。

異なる文明が一同にプレーヤーとして地球という舞台に立ったのは、人類史上かつてないことである。はたして一つのハーモニーを奏でることができるのか。

ハンチントンが描いたのは、文明が衝突する世界である。しかし、それは近代 500 年にわたって、世界を敵と味方、支配と被支配にわけて、排他的に支配してきた西欧文明の発想である。

一方、音楽の調和を理想とする政治モデルを、中国は 3000 年前から考案していた。
本発表は「和」と「天下」をキーワードに、周王朝に実現したとされるこの理想的な政治モデルを考察した上、これが今日のグローバル文明にどんな示唆を与えてくれるのかについて、探ろうとするものである。

グローバル文明と反近代文明の衝突

金子　晋右
（佐賀大学）

西欧起源の近代文明は、「グローバル文明」として世界中を覆っている。近代文明は、自由、人権、民主主義、国際法などの近代的価値を重視している。それに対し、自由や人権などを蹂躙する反近代文明が、近年、世界各地に出現している。習近平政権や、IS（自称イスラム国）などのイスラム過激派勢力等である。21 世紀の現在、我々が直面している難題は、グローバル化した近代文明に牙を剥く反近代文明の台頭である。

いったいなぜ、反近代文明は勢力を拡大しているのか。その理由は、近代文明は西欧起源ゆえに、非西欧文明圏では、不適合を起こす者が発生するからだ。反近代文明は、彼らの不満を吸収し拡大しているのである。

一例を挙げよう。19 歳のバングラデシュ系英国女性シャミマ・ベガムは、国籍剥奪問題で、最近マスコミで話題となった若者である。彼女は 15 歳の時に、IS に参加するため、自らの意志でシリアに渡航した。BBC の報道によると、英国在住だったシャミマの不満は、彼女の家族が結婚を世話してくれなかったことである。IS は、結婚相手を提供し、自分と家族の面倒をみてくれると宣伝しており、実際、当初はその通りだったという。

結婚に関する南アジアの伝統的慣習は、両親や親族が結婚相手を決めるアレンジド・マリッジである。ある調査によると、英国の公立学校に通うバングラデシュ系少女達（16 歳から 19 歳まで）の 10%はアレンジド・マリッジにより、既に既婚者である。残りの少女達に結婚に関する希望を問うと、アレンジド・マリッジを望む者が半数で、恋愛結婚を望む少女は 15%しかいなかった。

上記調査で、自由な恋愛結婚を望む少女が少ないのは、なぜか。個人の自由な選択に委ねられた時、恋愛や結婚に関しても、「恋愛市場」や「結婚市場」が発生し、恋人や配偶者を入手する勝者と、入手できない敗者が生まれるからである。しかもその「自由市場」における勝敗は、本人の努力と、能力（先天的及び後天的）の高低による。だがアレンジド・マリッジならば、努力も能力も必要ない。ゆえに、努力が苦手で能力も低い者は、自由を敬遠するのである。これは、結婚に限らず、就職などに関しても同様である。

個人の自由を重視する近代文明は、能力主義・努力主義社会となり、落伍者や、落伍の不安に苛まれる者を、大量に生み出す。そこにつけ込み勢力を拡大しているのが、反近代文明なのである。

経済的平等性についての一考察

林 正博
（東京都市大学 工学部 電気電子通信工学科）

2018 年比較文明学会大会において、発表者は、経済的同時代性の概念を提案した。これは、「ある文明のある時代の経済施策の動向」が、それとは「異なる文明の経済施策の動向」に、偶然を越えた類似性を示すことである。そして、具体的事例として、以下の二つの経済施策が経済的同時代性を示すと主張した。

経済施策 1. 1980 年代以降のレーガノミクスやサッチャリズムで提唱された、国家機能を縮小することで経済を活性化する経済施策

経済施策 2. 日本文明において、全ての土地を国有化する律令制を崩壊させた、三世一身の法・墾田永年私財の法、即ち、民間の土地所有を広める経済施策

関連して、現在急速に普及しつつあるビットコイン等の仮想通貨の登場と、かつての、国家による価値保障のない私鋳銭の普及は、上記の経済的同時代性を支持する類似現象の一つであると主張した。そして、経済施策 2 が、最終的に日本文明の中世をもたらした事実を踏まえ、今後の経済施策 1 の継続と拡大により、近未来において、中世に良く似た社会（以下「未来の中世」と呼ぶ）が到来するとした。さらに、かつての中世においては、荘園という共同体が重要な役割を果たした事実より、未来の中世においても、荘園に類似する共同体が重要な役割を果たし、人々は、国家への帰属意識よりも、このような共同体への帰属意識が強い社会になると予想した。

ここで、2018 年度の発表において、共同体を「コミューン」という言葉で表現したことから、未来の中世は、コミュニストが目指すような経済的平等性を追求する社会であり、深刻な貧富の差を解消するという印象を与えたようである。

しかし、本発表では、未来の中世が、このような経済的平等性を追求するとは考えにくいことを示す。

過去に登場した中世の中で、最も発達した典型的な中世は、西欧文明の中世である。この中世は、キリスト教の支配する中世であった。もし、キリスト教が経済的平等を目指す宗教であるならば、中世という時代が経済的平等性を追求するとしても矛盾は起きない。しかし、キリスト教が経済的平等を目指さないことは、マタイ福音書 13 章 12 節に明記されている「おおよそ、持っている者は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまで取り上げられるであろう」という聖句から明らかである。この例からは、やはり、中世が経済的平等性を追求するとは考えにくい。

オンリーワン企業の条件と源流となる日本の精神文化

横尾紀雄
（中央大学政策文化総合研究所）

経営コンサルタントの故船井幸雄氏によると仕事や経営は、
・教育性　お客様や社員など関わる人全ての人間性が向上する。
・公共性　社会の役に立つ存在となる。
・収益性　お客様満足の結果、利益を出す。
という三つの等価値を持つと唱えている。
筆者は、その価値に対する使命は「お客様へのしあわせ感の提供」であると定義した。
逆に仕事する者にとってのしあわせ感は、その仕事が好きである、向いている、収益を生む、世のためになる、の四要素を満たす時に「いきがい」として発言されると言われている。
日本は 100 年の老舗企業が 10 万社以上あり、オンリーワンの存在価値に起因すると規定できる。その本質を考察し、経営者の心の源流となる日本の精神文化を探る。
調査事例、伊那食品工業株式会社
寒天メーカー業界首位。50 期連続増収増益、新卒採用 60 倍など従業員顧客満足も高い。同社塚越元会長（現最高顧問）の提唱する戦略「年輪経営」に共鳴する経営者は多く、トヨタ自動車株式会社豊田章男社長も塚越元会長を師と仰ぐ一人である。
筆者の知見より下記のことが推察できる。
１．オンリーワン企業の経営戦略
下記の条件でオンリーワン企業になるという仮説を立てた。
・オーナーのキャラクター経営から理念経営へのシフト、家訓の継承等
・独楽型組織体制およびリーダーシップ
・お客様に愛される一番市場マーケティング
・働く人をしあわせにする人材活性化マネジメント
２．経営者の人生観、経営観に影響する日本の精神文化
日本の経営者は決して割の良い仕事ではない。彼らを駆り立てる原動力は、生来より培われてきた神道と仏法等日本の精神文化に則した下記のような価値観に起因する。
・「和を以て貴しとなす」競合相手とも争わず包み込む。目上を敬い輩と共に歩み後進を導く。
・「感謝と報恩」自分が活かされているという思いで周りと先達への感謝を忘れず自己の精進を重ね、さらには後進を導く。
・「自灯明法灯明」全てを自己責任として行動する。もっと良いモノやサービスを作り提供する。
・「経営者は菩薩行」社員やお客様など周りの人々をしあわせにすることにより自分がしあわせになるという生き方を選択し歩む。
・「天上天下唯我独尊」経営者個人としても法人としても独自の存在意義と価値を持つ。
今後、上記１、２の仮説をさらに深耕させていく所存である。

以上

社会的カテゴリーは社会科学での重要性を減じつつあるのか

平林豊樹
（社会学者）

社会現象の分析に際して社会的カテゴリーや社会集団に着目するのは無益化しており各人の固有の事情に注目しなければならない、という主張が、1990 年代以降の人文科学・社会科学の中で一定の勢力を持つようになった。斯様な主張は、なぜ勢力を持つようになったのか、どの程度正鵠を射て居るのか。

斯様な主張が支持者を集める理由は、二つ在るだろう。第一、生物学が飛躍的に進歩したから。第二、「第二の近代（概ね高度経済成長期以降の先進諸国）」では社会的カテゴリーが諸個人を包摂し切れなくなり無力化したという説が、説得力を持つようになったから。

第一の理由の背景には、生物学の成果を人文科学・社会科学へ積極的に導入しようとする動向が在る。各人の生得的知能が社会的地位の配分を決定する、という説が、往年のような社会的非難を浴びずに、一部の有力な研究者の間で根強い支持を獲得している。また、生物学の研究を倫理学に導入するのは、今や当たり前のことである。

第二の理由の背景には、社会保障制度が各人を制度的に個別に扱い各人に一定の生活水準を保障するという現実が在る。地縁血縁などの社会的カテゴリーから解放された諸個人は自由に個別に思考し行動する、というわけだ。貧困問題のような社会問題ですら、集団やカテゴリーの利害を示す問題としてでなく、各人の人生の中の様々な差異の複合現象として捉えられるべき問題とされる。

如上の見方に妥当性が無いわけではない。しかし、こうした見方は、社会問題を自己責任の問題に帰す背景を、成す。例えば貧困問題の場合、往年のそれと現代のそれとに質的な差異は在るけれども、昔と同様に今も、貧困状態へ下降移動しやすい層とそうでない層とが厳然と存在する。両者の違いは社会制度の在り方や変化に因るのであり（知能の高低だけに因るのではない）、高学歴者や特別な人間関係を有する人々の方が社会制度を巧みに利用できる。

現代でもなお、生得的要因や個人的事情だけで社会問題を説明し尽くすことはできない。そうであるからには、社会科学者なら、社会的カテゴリーや社会集団が個人に及ぼす甚大な影響や社会制度の効力に着目して研究すべきである。

第 37 回大会実行委員会

委員長	保坂　俊司	中央大学
委　員	安田　喜憲	ふじのくに地球環境史ミュージアム
	鬼頭　宏	静岡県立大学　学長
	佐々木　一也	立教大学
	島田　竜登	東京大学
	加藤　久典	中央大学
	岡嶋　裕史	中央大学
	大森　一三	法政大学

協　賛　中央大学政策文化研究所

第 37 回大会　比較文明学会大会プログラム
発行日：2019 年 10 月 12 日
編集・発行：　比較文明学会第 37 回大会実行委員会　事務局
mail: jscsc37th@gmail.com